

日本女子大学 目白キャンパス正式オープン

妹島和世氏が全体デザイン・設計



採光と風通しを考えた百二十年館の吹き抜けのパーティオは、学生の憩いと創意工夫の場を提供

建物の連続性、多様な滞在スペース

「目白の森のキャンパス」整備は、2021年度120周年を迎える日本女子大学の記念事業として12年から動き出した。同年に西生田キャンパス（川崎市）にある人間社会学部の目白キャンパスへの移転が決まり、21年4月に創立の地である目白に4学部15学科と大学院が統合することになった。学生数は2000人ほど増えて約6000人になる。同事業では、2月に完成した百一十年館、3月完成の新学生棟のほか、図書館（19年に先行オープン）、青蘭館（同）の4つの建物が新設された。いずれも設計・監理は妹島和世建築設計事務所・清水建設設計JV、

「目白の森のキャンパス」整備は、2021年度120周年を迎える日本女子大学の記念事業として12年から動き出した。同年に西生田キャンパス（川崎市）にある人間社会学部の目白キャンパスへの移転が決まり、21年4月に創立の地である目白に4学部15学科と大学院が統合することになった。学生数は2000人ほど増えて約6000人になる。同事業では、2月に完成した百一十年館、3月完成の新学生棟のほか、図書館（19年に先行オープン）、青蘭館（同）の4つの建物が新設された。いずれも設計・監理は妹島和世建築設計事務所・清水建設設計JV、



図書館は4階のフロアまでの回遊スロープと書架・閲覧スペースの連続性を特徴とする



新規4建築共通のヴォールト状の屋根を持つ百二十年館外観。1階は半分以上がピロティ空間

いので、できるだけ緑を残したい」と思い、目白の森のキャンパスというコンセプトでスタートした」などと話した。

そして、公道で4地区に分かれたキャンパスを緑でつなぐこと、目白通りと不忍通りに面した門の近くの建物をキャンパスの顔とすること、百年館など既存建物と新規建物を融合させ連続性を生むこと、さまざまな性格を持つ学生滞在スペースを散在させること、学生だけでなく地域の人々の活動を行う場を提供し地域とともにあるキャンパスを目指すことなどの設計意図を説明した。



妹島氏と篠原学長（右）

コンセプトは「目白の森のキャンパス」

新設された百二十年館は、S一部RC造地下1階地上3階建てで延べ5799平方メートル。人間社会学部の4学科研究室、大中小23の教室、ラーニング・commons、学生滞在スペースが入る。建物上部には、新規建物共通のシンボルとなるヴォールト状の屋根を設置した。キャンパス内の動線や周囲の建物などへの圧迫感を抑えるため、低層の建物とし、採光と風通しを良くするために大きな吹き抜けの中庭（パーティオ）を設けている。パーティオは学生の憩いの場であるとともにイベントスペースにもなり、学生の創意工夫が生かせるとしている。

1階の半分以上が屋外のピロティ空間で、パーティオと一体となって棟全体を見渡すことができる。パーティオに降りると、四方を囲む学修空間と自然なつながりが生まれる。ピロティ空間は、目白通り側からの人の流れと不忍通り側からの人の流れを融合する要ともなっている。地下1階のラーニング・commons（かえで）は、学外学修推進の場、自治体や企業などと連携し社会への扉を開く場として学生の相談や支援を行う。語学学習などのランゲージ・ラウンジも

ここに移動して地域や世界へ発信する拠点も目指している。不忍通り側の入り口に建つ新学生棟はキャンパスの1つの顔となる建物。普段は食堂、学生滞在スペースとして使う。施設内はWi-Fi環境が整い、大人数のイベント開催も可能で、学生たちの創意工夫でいろいろな活用ができるという。新規建物共通のシンボルのヴォールト状の屋根の下には、テラススペースがあり、ここも多様な使い方ができる。妹島氏は「大学と地域を柔らかくつなぐスペースになれば」と話している。ガラス張りの壁面は百二十年館と同様に、災害時対応や新型コロナウイルスの影響を考慮し、自然換気できる窓を随所に設置している。S造2階建て延べ1134平方メートル。図書館は、4階のフロアまで回遊するようにスロープが設けられ、ワンルーム空間のように書架スペースと閲覧スペースが連続的につながっている。妹島氏によるとそれぞれの人がその時の気分や、自分の好きなところを選べる多様な場所を持つ空間を考えたという。S一部RC造地下1階地上4階建て延べ6607平方メートル。青蘭館は主に学生の滞在スペース、隣接する附属豊明幼稚園・小学校保護者の休憩スペースなどとして使う。ガラス張りの壁面によって学生の活躍を地域に発信する場の機能も持たせている。S造平屋建て198平方メートル。

